

書評

「その頃も旅をしていた」と・・・

福田 幸正
主任研究員
(公財) 国際通貨研究所

浅沼信爾・小浜裕久著、2013年、『途上国の旅：開発政策のナラティブ』、勁草書房、

開高健の小説『夏の闇』の書き出し「その頃も旅をしていた」が、本著の「序章 開発の旅」の冒頭に引用されている。

たしか、『夏の闇』は、ベトナムでの戦場経験の刺激が強すぎて、日常生活の中に生の実感を得ることができないでいる開高健その人自身とおぼしき小説家を主人公とした、終わりのない旅の物語だったと思う。学生時代に読んだが、難解だったのでこれくらいしか覚えていない。しかし、『夏の闇』を読んでいなくとも、途上国が放つなにかにとりつかれて、途上国とかかわり続ける者であれば、冒頭から「その頃も旅をしていた」と言われれば、不思議と引き込まれてしまう。

出版社による本著の内容説明は、簡潔にまとまっている。“開発途上国にはさまざまな発展パターンがある。開発独裁で成功した国、ガバナンスに失敗した国、「資源の呪い」を経験した国、ポピュリズムに陥った国、等々。その成功と失敗を分けたものは何であろうか。本書は、開発経済学の立場から、著者自身が実際に検分した国々を対象に経済の発展段階に至る経緯をつぶさに観察し、学生・研究者のためにその実際を解き明かす。”

本著で取り扱われている途上国は日本も含め 11 カ国（マレーシア、シンガポール、韓国、インドネシア、アルゼンチン、ガーナ、スリランカ、バングラデシュ、ネパール、ブータン、日本）。これらの途上国には、それぞれ個性的な開発の物語があり、また著者が実際に国づくりの重要な局面で実質的にかかわった国ばかりだ。

前述の出版社による内容説明にあげられた、「開発独裁」、「ガバナンス」、「資源の呪い」などの開発用語は、開発に携わる人々の間でも気軽に使われ過ぎるきらいがあるが、本著では途上国での事例に即し、それらの本質を明らかにすることを旨としている。

たとえば、第 1 章で取り上げられているマレーシアの扱われ方を私見とともに紹介させて頂きたい。なお、第 1 章では、1950、60 年代には、一次産品輸出は成長のエンジンにはなりえないという当時の国際的コンセンサスに反して、ゴムやパーム油の輸出を梃

子にした経済成長を成功させたマレーシアの例が描かれているが、第7章のスリランカの部でも、初期条件が似通ったスリランカとの比較でマレーシアを分析している。マレーシアの課題を一言でいえば、マレー人優遇政策「ブミプトラ政策」だろう。これも、研究者の間でも一言で済まされるくらいがあり、本質的な解説に接することはない。本著では、ブミプトラ政策を単なる政策ではなく、マレーシア憲法で明文化されたマレーシアの国の在り方そのものと位置付けている。また、マレー人、華人、インド人の与党連合体制も、マレー人の優先的な地位を前提としつつも、3民族が平和裏に、そして永続的に共存することを保証する制度として、マレーシア建国時に出来上がっていたことを強調している。さらに、3民族の利益調整に最も有効なのは経済成長であり、非マレー人の既得資産を侵害することなく、パイの増分を利害調整の財源としたことの重要性も指摘している。マレーシアにとって経済成長は3民族の共存のために必要だったのだ。

このように、本著は、途上国が国づくりを進める一時期に、決定的な意味を持った開発課題と、それに対して如何なる取り組みがなされたかを、成功談、失敗談とともにまとめている。ただし、その時点と現時点を繋ぐ経路については必ずしも詳述されておらず、何か物足りなさを感じる読者もいるかもしれない。そこまで明快に開発課題を類型化し、それぞれの本質を示してくれたのなら、各国の過去、現在、未来を一貫して語って欲しかった、と。しかし、それを本当に知りたければ、本著が示した本筋に沿って、その後の途上国自身の開発の旅を辿り、また、その先を展望してみるくらいの努力は払ってみたい。

そのように考えれば、マレーシアの場合は、次のように続けることができるだろう。一種の **affirmative action** であるブミプトラ政策は、所得、雇用面で一定の成果を出したが、1997年のアジア通貨危機にマレーシアが直面する中から変質したといわれている。すなわち、ブミプトラ政策の名の下に、あらためて国営企業や政商に対する国家の庇護が強化され、その過程で貧富の格差が拡大し、汚職が蔓延した。さらに、マレー人優遇によって将来に期待を持てなくなった有能な華人の国外頭脳流失も起きている。長年のブミプトラ政策の弊害や、数年後には手が届きそうな高所得国入りが、これまで3民族の微妙なバランスの上に成り立っていた **ethnic peace** にどのような影響を及ぼしていくのか。マレーシアの国のかたちそのものにかかわる問題が、早晚マレーシアを待ち受けている。

本著の結論をあげるとすると、国づくりを長期的なビジョンをもって主導するのは各国の指導者だが、その指導者を補佐するテクノクラートの良し悪しが国づくりの成否を決める、ということだと思ふ。数多くの途上国で、その国のテクノクラートと国づくりの

ために一緒に汗を流してきた著者ならではの、インサイダーとしての自信に裏付けられた結論であろう。

最近、特にアジアに関して言えば、歴史はあたかも 1997 年のアジア通貨危機からはじまったとするような論考が多い気がする。また、書店に行くと、インドネシア関係のビジネス書が平積みになっている。あたかも、つい最近インドネシアを発見したかのような取扱われ方だ。そんな皮相的な風潮であればこそ、本著を通して途上国の発展の芽をあらためて確認してみたい。

その頃も旅をしていた。

そして、今も旅をしている。